

時

40日以上のお休みが終わり、元気な声が学校に戻ってきました。私にとっては十分すぎるほどの期間でしたが、やり残したことが一つありました。映画館での映画鑑賞です。この夏は話題作も多く、ぜひ観たいと思いつつも、外の暑さと甲子園中継に押し切られて、テレビの前から離れられませんでした。

記憶をたどれば、私の最初の映画館体験は小学5～6年生の頃。中学生の兄と連れ立って観たのが、大林宣彦監督・原田知世さん初主演の『時をかける少女』でした。暗闇と光、スクリーンを流れる「時間」の匂いに包まれ、不思議なことに帰り道は少し背伸びして大人になった気がしたのを、今も鮮明に覚えています。

そんな思い出に背中を押されるように、2学期が始まる前、職員の起案文書に目を落とすと「午前12時」という表記で、一瞬、手が止まりました。「午前12時」は、「正午」又は「午後0時」です。しかし、何となく分かりにくさもあります。さらには、「午前12時30分」や「午後12時30分」のように12時□□分が付くと、昼か夜か解釈が割れやすくなります。

時間の表し方は歴史の中で変わってきました。日本は明治5年（1872年）に太陰太陽暦をやめ、太陽暦（グレゴリオ暦）を採用。江戸時代までの不定時法（昼・夜をそれぞれ六つに分け、季節で一刻の長さが変わる）から、1日24時間の定時法へ移行しました。このとき西洋のA.M/P.M.の考え方が入り、午の前＝午前／午の後＝午後という区切りが学校や鉄道の時刻表、新聞を通じて定着していきます。

さて教室をのぞくと、2年生はちょうど「時こくと時間」の学習の真っ最中。短い針・長い針、午前・午後、そして生活との結び付け、「7時に起きる」「12時30分に給食」。読み取れた瞬間の「できた!」「わかった!」という表情は、時の流れを自分の手でつかまえた喜びそのものです。学校生活、家庭生活において「時こくと時間」は、生活に密接に結びついています。



放課後、西の空、三宅島大久保浜の向こうへ太陽がゆっくり沈んでいきます。同じ太陽でも、朝と夕ではまるで別人のような表情です。同じ一日でも、言葉の選び方一つで伝わり方は変わります。

『時をかける少女』の主人公は、時間を行き来する旅の果てに、「今」を丁寧に生きることを選びました。私たちの校務も同じです。「午前12時」と「午後0時」、「正午」は同じ意味ですが、大切なのは、正確にかつ相手に伝わるように「時を書ける」こと。

現在、正午。

そろそろ給食の時間です。今日の献立は、麦ごはん・回鍋肉・わかめスープ・牛乳。

職業柄つい早食いになりがちですが、今日は「時をかけて」味わいます。いただきます。